男子大学サッカー選手におけるプレースピードに関する研究

研究代表者　塩川勝行（鹿屋体育大学）
メンバー　　前田明（鹿屋体育大学）

目的

サッカーでは、常に状況が変化し続ける中で、ボールや味方、相手の位置などから情報を収集し、攻守においてプレーに関わり続けなければならない。その状況の中で、ボールを受けた選手は、ボールを運ぶ、味方にパスをする、ゴールにシュートをするといった状況に応じて、正確に素早く技術を発揮することが求められる。

現代のサッカーにおいて、味方からのパスをコントロールして状況判断を行い、味方にパスを送るまでのスピードをプレースピードと言い、そのスピードが重要視されている。

そこで、男子大学サッカー選手を対象にインサイドでのボールコントロールからインサイドパスを行うまでのプレースピードとそれに伴うパススピードとパスの正確性について検討を行うことを目的とした。

方法

１．実験協力者

男子大学サッカー選手16名を対象に、全国大会出場経験のある8名と出場経験のない8名の競技レベル別で2群に分け実験を行なった。

２．実験方法

実験協力者から15m離れた先にパスの方向を変えた2m幅のゲートを3つ設置し、約7m離れたサーバからのパスをインサイドでコントロールしてインサイドでのパスを行なった。1つのゲートに5回成功するまで試技を行なった。

３．測定方法

プレースピードの測定は、実験協力者の側方より、CASIO製EX-F1を用い、300fps(300コマ/1秒)モードで撮影を行なった。その映像をもとにコントロールからパスまでの時間及び軸足を踏み込んでからパスを行う時間を算出した。またパススピードについては、パスを行う地点と15m離れたゲート先に光電管を設置しパスの時間を記録した。

結果

１．パスの成功率について

パスの成功率については、全国大会出場経験群が89.9±5.9%に対し、全国大会出場経験なし群が、87.5±9.9%と差は認められなかった。

２．パススピードについて

パスを行なった地点からゲートまでにかかった時間については、全国大会出場経験群が0.854±0.06秒に対し、全国大会出場経験なし群が1.071±0.12秒と5%水準で全国大会出場経験群がゲートの通過時間が有意に短く、パススピードが速かった。

３．プレースピードについて

インサイドコントロールしてからパスを行うまでの時間においては、全国大会出場経験群が0.839±0.08秒に対し、全国大会出場経験なし群が0.956±0.12秒と5%水準で全国大会出場経験群がコントロールからパスまでの時間が5%水準で有意に短く、プレースピードが速い結果となった。

考察

全国大会出場経験群は全国大会出場経験なし群に比べパスの成功率では、差は認められなかったもののパススピードやプレースピードでは有意に差が認められたことから、スピードを伴った技術の正確性では大きな差が認められたと言える。全国経験なし群が全国大会出場経験群のようなスピードを求められれば逆にパスの成功率は下がると考えられる。

そのパススピードやプレースピードが遅くなる要因は、インサイドでのコントロール技術にあると考えられ、コントロールする際に次パスを行いやすい場所にボールを置けているか、そうでないかの違いが大きいと言える。全国大会出場経験群はパスを行いやすい場所に置けているため、コントロールからパスの動作もスムーズに行え、軸足もしっかりと踏む込めるため強いパスが行えると言える。

まとめ

本研究では競技水準の違う2群で、インサイドコントロールからのインサイドパスまでの時間とパススピードについて検討を行なった。競技水準が高い選手はボールコントロールからパスまでの時間やパススピードが有意に速いことが示唆された。その要因はボールコントールした際のボールの置きどころが大きな影響を与えている可能性があることが示唆された。